

苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと  
主は彼らを苦しみから導き出された。  
主は嵐に働きかけて沈黙させられたので  
波はおさまった。  
彼らは波が静まったので喜び  
望みの港に導かれて行った。(詩篇 107 の 28～30)

They cried out to the LORD in their trouble,  
and he brought them out of their distress.  
And he commands the storm,  
and it is calmed into a gentle breeze, and its waves are still.  
They were glad when it grew calm,  
and he guided them to their desired harbor.

---

この世で生きるかぎり、さまざまの予期しない問題が生じてくる。予想していなかった善きことが与えられこともあるが、この世を生きていくとき一人一人が、他の人にはないような苦しい問題が生じてくるということは至るところで見られる。病気や事故、家族、学校や職場等々での人間関係、自分の罪からくる苦しみ等々、他人にはわからない難しい状況が生まれてくる。

そのようなとき、その苦しみがひどいほど人間に向って訴えてもわかってはもらえないし、そこから救いだしてもらうことも難しい。聖書が私たちに一貫して指し示しているのは、この聖句にあるように、そのようなときに訴え、叫ぶ相手がおられる一神こそがそのお方だということである。神は人間とちがって、目にも見えず、人間同士のように直接にその慰めを聞いたり、愛のまなざしを受けることができない。しかし、私たちの心が真実であって真剣に神に求めるときには、心のなかに、明確ではなくとも、神の御姿をおぼろげながらであっても実感でき、そのお方からの励ましを聞き取ることができるようにと導かれる。

この世のさまざまの苦難は、嵐であり、海のただなかで、大波に呑み込まれそうになる状況と言える。この詩の作者は、そうした現実の嵐に直面しつつ、そこから神に求め続けた。そして与えられた。神がその嵐に働きかけてとどめてくださったという経験を与えられたのであった。そして魂の深い平和を与えられ、目的地である神の国へと導かれていった。

この詩は、「人生の海の嵐に」という讃美になって広く親しまれてきた。「いと静けき 港に着き われは安らう 救い主イエスの手にある 身はいと安し…」

この世の嵐にもまれ、苦しみの海に沈みそうになっている数知れない人々が、いまから二千数百年以上昔に実際に経験されたこの詩のように、その苦しみや悲しみから救いだされて、静かなる港一神のもととなる憩いへと導かれることを願ってやまない。

---



伊吹山は、1400m に及ばない山であり、かつ 9 合目まで車道がついているので誰でも近づける山です。そしてその 9 合目付近から頂上にかけて、夏には、多くの高山性の野草が咲いて比較的狭い範囲を歩いても変化の多い植物に出会うことができます。

この、コオニユリは、ふつうのオニユリが、堤防や野山に見かけるのに対して、かなり高いところや湿原で見いだされるもので、オニユリよりやや小型で、ムカゴができないということで区別されます。徳島の剣山(標高 1955m)につながる 1700m ほどの山の高原でも色鮮やかに咲いていたのが思われます。

写真のものは、標高 1000m を越えるところで、山々を悠然と見つめつつ咲いている風情があり、緑一色のなかで、鮮やかなオレンジ色がひととき印象的です。

新鮮な大気、その澄みきった高山のなかにあって、その大気をいっぱい吸って喜ばしく咲かせているのを感じます。

人間とちがって、どこまでも純粋な美しさ—それはあらゆる美の根源であり、創造者である神ご自身の創作によるからです。こうした高山での花は、周囲の山々からの呼びかけを聞き、それに応えていっそう色鮮やかに咲いているような雰囲気があります。

主を讃美せよ…ハレルヤ！ という語りかけが、聖書の詩篇の終わりの部分に繰り返し現れます。この写真の風景は、清くあれ、美しくあれ、そして山々のように泰然たれ…と無言の讃美を歌い、私たちにも語りかけてくるものを感じます。(写真、文とも T.YOSHIMURA)